

放鳥までの歩み

昭和40年

コウノトリ人工飼育の始まり
昭和40年、野生1つがいを保護し、人工飼育の取り組みが始まった。しかし、成功するまでに24年もの月日を要した



(写真提供：神戸新聞社)

昭和30年

コウノトリとともに
全国各地でコウノトリが姿を消しつつあった中で、豊岡盆地では、昭和30年代までこのような風景があった



(写真提供：富士光芸社)

江戸時代

1892(明治25)

1894(明治27)

1904(明治37)

1908(明治41)

1921(大正10)

1934(昭和9)

1939(昭和14)

1953(昭和28)

1955(昭和30)

1956(昭和31)

1959(昭和34)

1962(昭和37)

1965(昭和40)

1966(昭和41)

1971(昭和46)

全国各地でコウノトリが見られる

明治維新以後、乱獲により個体数が激減する

コウノトリが再び姿を現し、鶴山(市内出石町桜尾)に1つがいが営巣

鶴山に営巣した4羽がヒナをかえし、「瑞鳥」ブームが巻き起こる

狩猟法が改正され、コウノトリが保護鳥に追加指定される

コウノトリの繁殖地として「鶴山」が史跡名勝天然記念物に指定

豊岡盆地を中心に生息地が拡大し、黄金期を迎える

戦争により大量に松が伐採されたため、営巣の場所を失い、個体数が激減

天然記念物指定が「生息地」から「種」に変更

行政と民間が共同した「コウノトリ保護協賛会」(のちに「但馬コウノトリ保存会」と改称)が結成され、組織的な保護活動が始まる

特別天然記念物に指定変更

「コウノトリをそととする運動」や人工巣塔・人工餌場づくりなどの活動が展開

「ドジョウ1匹運動」が展開される

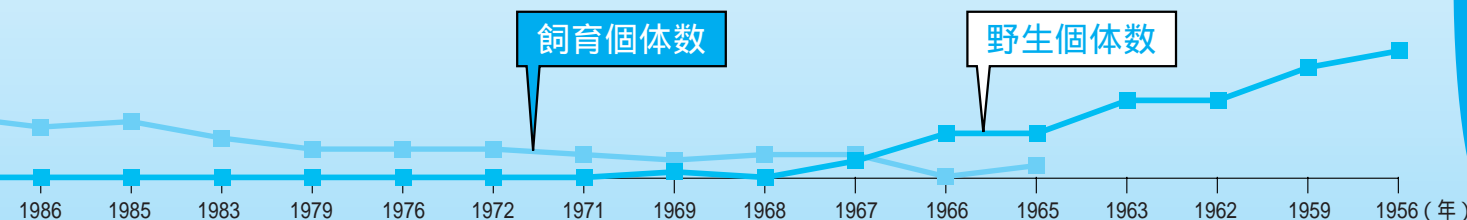
豊岡市野上に飼育場(現コウノトリの郷公園付属施設保護増殖センター)が完成。野生1つがいを保護し、人工飼育を開始

コウノトリが兵庫県の県鳥に指定される

東京教育大学教授が豊岡盆地で死んだコウノトリの死因は水銀剤農薬によると発表

市内で最後の野生コウノトリが保護されたが死亡し、日本の空から姿を消す

豊岡周辺の個体数の推移





平成11年
 県立コウノトリの郷公園完成
 野生化に向けたさまざまな研究と試みを行う拠点施設が完成。翌年には、市立のコウノトリ文化館がオープン



平成13年
 ビオトープ水田開始
 周辺地域では、コウノトリを受け入れる準備が進められた。平成14年に飛来した野生コウノトリは、早速にビオトープ水田に舞い降りた



平成元年
 ヒナ誕生
 昭和60年にロシアから贈られてきた幼鳥が夫婦となり、初のヒナをかえした。飼育場は喜びで沸き返った

